



玄界灘を進む400隻の大船団

秋季大祭(田島放生会)齋行



11月祭事暦

- 毎月1・15日月次祭
午前10時～
高宮祭・第二宮祭・第三宮祭
引き続き護国神社
月命日祭(1日)
午前11時～
総社祭
浦安舞奉奏(1日)
七五三祭齋行
- ※ 総社祭に併せて七五三祭齋行
※ 15日は、午前10時総社祭。
終了後引き続き高宮、第二宮・第三宮祭。護国神社拝礼
※ 15日は、豊栄舞の奉奏は行いません。
- 3日
午前11時～
明治祭
- 23日
午前11時～
新嘗祭

十月一日
海上神幸 「みあれ祭」
昨日までであった波のうねりも収まり、眩しいほどの朝日の快晴。午前八時三〇分中津宮(大島)で、大島・鐘崎の神輿奉仕者や、漁業関係者、多くの参拝者が参列し、

九月二十九日に台風二十一号が九州南部を横断し、この影響による海上神幸「みあれ祭」の齋行が懸念されたが、絶好の日和に恵まれ秋季大祭(田島放生会)が齋行された。
今年では平成十一年以来の週末(金・土・日)となり、天候も二日に曇りとなった程度で、一日は汗ばむほどの晴天となり、連日多くの参拝者で賑わった。
特に一・二日(金・土曜日)の夜、二・三日(土・日曜日)の日中は、参拝者が押し寄せ大駐車場は満車状態。周辺道路は渋滞し、三日間で約二十万人の参拝者が訪れた。



沖津宮・中津宮二隻の御座船

出御祭が齋行された。
終了後、先頭の大島小学校鼓笛隊による「聖者の行進」の演奏に併せ、沖・中両宮の御神璽を奉安した神輿が大島港まで御神幸。到着した港の内外には、「波切り御幣」「紅白の吹流し」「大漁旗」等で満艦飾した、宗像七浦の漁船約四〇〇隻が待機。
沖・中両宮の神輿が御座船に奉安されると、午前九時三〇分合図の花火が打ち上げられ全船出港。二隻の先導船を先頭に、二隻の御

菊は奈良時代に中国より我国に伝えられたとされている。
菊は漢名で、キクはその音読み。和名では加波良(カハラ)と毛木(モキ)、鬮草(カキクサ)、寿客(シユカク)とも呼ばれている。
現在世界では一萬種以上の菊があり、季節によって、夏菊・秋菊と寒菊に分けている。当初は宮中を初めとする一部の階級層の間で鑑賞用の花と共に薬用として用いられていた。鎌倉時代の後鳥羽上皇は大の菊好きで、衣服や様々な調度品に菊の文様をあしらっていたことから、次第に菊紋は天皇家のシンボルとなっていく。そして明治元年には菊花が改めて皇室の紋章に定められた。菊紋は、警視庁の徽章、国会議員が胸につけている議員バッジ、日本国パスポートの表紙の図案にも使用され国家を象徴する花である。また毎年秋、京都で行われる競馬は「菊花賞」、皇室と由縁のある社寺の提灯にも菊紋が用いられている。
一般的に国花は桜と認識されているが、皇室の御紋章は菊である以上、菊も我国を代表する花と言える。いわば、国花は「桜」と「菊」の二つあるということである。
そう考えると当大社で開催中の菊花展の見方も変わるかもしれない。
(T・S)



神具・装束 結婚式場調度品
福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番
本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)~4番
(075)343-3341番

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567



沖津宮出御祭

座船、お供する供奉船その数約四〇〇隻の大船団は、幾筋もの航跡を残しながら進んだ。

一方その頃、宗像市田島の辺津宮でも午前九時に御祭が斎行され、辺津宮御神璽が沖・中両宮の御神璽の到着する神湊港へと出御された。

大船団は秋晴れの爽やかな空の下を順調に海上神幸。空には取材のヘリコプター五機が舞い、波風のない玄界灘を順調に進んだ。

神湊港入港間近になると、供奉してきた船団は、順次御座船を一周し各港へと帰っていった。午前十時四〇分予定より若干遅れて、沖・中両宮の御座船は神湊港に無事到着。みあれ祭は滞りなく終了した。

沖津宮 神迎え神事奉仕船 (敬称略)

その後三宮の御神璽を乗せた三台の御座車は、宗像警察署の白バイ・パトカー、宗像交通安全協会広報車、消防自動車に先導されて辺津宮まで陸上神幸し、正午

一年振りにお揃いになられた宗像三女神は、玄海魚市場でお祓いの後、若い男衆に担がれ神湊の高台にある「頓宮(御旅所)まで陸上神幸。頓宮祭を斎行し、御座船奉仕者には感謝状と記念品が贈呈された。

- 御座船
- 第八宮地丸 (宗像漁協大島支所 船頭||宮本一郎)
- 海上神幸「みあれ祭」奉仕船 (敬称略)
- 中津宮御座船
- 海久丸 (宗像漁協大島支所 船頭||遠藤澄男)
- 沖津宮御座船
- 第八新幸丸 (鐘崎漁協、船頭||八尋時男)



入御される三宮の御神璽

- 前無事に辺津宮本殿に入御された。
- 陸上神幸奉仕車
- 御座車
- (株)新出光
- 西久大運輸倉庫(株)
- 宗像地区タクシー協会
- 【福栄タクシー(株)】
- 先導車
- 玄海ホテル旅館組合
- 宗像地区交通安全協会
- 【国民宿舎ひびき】



みあれ祭前の御神輿と御神璽(中津宮拝殿にて)

宗像市消防団第八分団 供奉車

- 宗像市消防団第十一分団
- 玄海ホテル旅館組合
- 【魚屋】
- 【玄海旅館】
- 【みなと荘】
- 【神湊スカイホテル】
- 【玄海ロイヤルホテル】

○一日祭(入御祭)

「主基地方風俗舞」

辺津宮に入御されて直ちに一日祭を斎行。保存会々員の奉仕で主基地方風俗舞が奉納された。

正式には「大嘗祭主基地方風俗舞」と呼ぶ。「大嘗祭」とは歴代天皇が御即位される一世一代の最大祭儀。

「主基地方」とは、この大嘗祭に際し奉獻する新穀をつくるための斎田が、京都を中心に東方「悠紀地方」、西方「主基地方」から選定された。

昭和天皇御即位の昭和三年、福岡県早良郡脇山村(現||福岡市早良区脇山)が主基斎田とされた。その時たった一度だけ舞われたのが、この主基地方風俗舞である。しかも門外不出を原則とし、大嘗祭が終わった後は一度たりとも奏されることはなかった。

しかし脇山村の産土神が「横山神社」という当大社の分祭祀社であった関係上、この記念すべき神楽舞を後世に伝えるべく、特別の思召しを以って宮内省より、当大社に御下賜いただいた。

ちなみに今上天皇の大嘗祭では大



みあれ祭後、頓宮へ向かう三宮の神輿

分県が主基地方に選定され、やはり主基地方風俗舞が奉奏されたが、全国で唯一伝承保存されているのは当大社のみである。

主基地方風俗舞奉仕者 (敬称略)

〈舞方〉 〈歌方〉

- 吉武 倫彦 石津 典秀
- 中野 武和 中野 修
- 清水 陽 中野 正徳
- 深田 龍介 吉田 敏幸
- 中山 真清
- 永島 卓爾

○十月二日

『流鏑馬神事』

南北朝時代の正平年間よりの歴史をもつ流鏑馬神事が、二日目の朝午前八時より宮木貞彦氏らにより奉納された。

射手が烏帽子と直垂姿に威儀を正し、本殿での命名式の後、神馬はお祓いを受け、神門前に設けられた馬場道を三頭が疾走。地上七メートルの的に向けて、次々と矢を射ると拝観者から盛んな拍手が起こっていた。

その年の豊作を占うと共に、矢は災難消除のお守りになると言われている。

射手奉仕者 (敬称略)

- 宮木 光広
- 宮木 敏己
- 木稲 修一

○二日祭

『翁舞』

二日祭では福岡市の喜多流(梅津忠弘氏門下)社中の奉仕により、能管や鼓の鳴り物に合わせ「翁舞」が神前に奉納された。この舞は古くから延命招福の御神徳が有名で、一目見ようと詰めかけた多くの参拝者は、風雅な舞にしほし見入っていた。

この時につけられる室町時代作の「翁面」は沈鐘伝説をもつ。今から約五〇〇年前の明応八年(二四九九)、



主基地方風俗舞

時の大宮司宗像氏国が鐘の岬(現〓宗像市鐘崎)の海中に沈んでいる大鐘を引き揚げようとする、突然大時化となり引き揚げを断念した。すると海は忽ち鏡のように穏やかになり、そのしずかな海面に翁の面が浮かびあがったという。この面を龍神から授かったものと、当大社の本殿に奉安し、以来神宝とされている。

○十月三日

『浦安舞』

大祭三日祭では地元玄海中学校二年生の女生徒四名による奉仕で、浦安舞が奉納された。

緊張した面持ちで十二単を着装し、檜扇と鈴を手に舞う姿は、拜殿に詰めかけた多くの参拝者を魅了した。浦安舞は昭和天皇の御製を皇紀二六〇〇年(昭和十五年)奉祝の際、祭祀舞として制定され、以来全国津々浦々の神社で舞われている。当大社では小・中祭では巫女が、春秋大祭時には地元出身の女子に奉納いただいている。

- 浦安舞奉仕者 (敬称略)
- 深田 いつみ (玄海中学校二年)
- 中野 美和 ()
- 小林 穂奈実 ()
- 吉井 美絵 ()

みあれ祭 (御生れ祭)

みあれ祭は毎年十月一日、事前に中津宮(大島)にお迎えした「沖津宮御神霊(沖ノ島)」と「中津宮御神霊」をお乗せした「御座船」二隻に、宗像七浦の漁船約四〇〇隻が大船団を組んでお供し、大島港(大島村)から神湊港(宗像市)までの玄界灘を約一時間かけて巡行する海上神幸。

同港に到着された沖津宮・中津宮の御神霊を、辺津宮(宗像市田島)の御神霊がお出迎えし、年に一度宗像三女神は再会する。そして同港の高戸にある「頓宮」での祭典後、辺津宮まで陸上神幸し、三日間に亘る秋季大祭(田島放生会)が幕を明ける。

この「みあれ祭」は、中世に行われていた(長手神事)を昭和三十七年に再興したもので、往時は辺津宮(宗像市)と、政所神社(現在は辺津宮境内社)と、その本宮である沖津宮(沖ノ島)間で、春夏秋冬の年四回行われていた。これを江戸期には年二回に変更され、現在は年一回となっている。

「みあれ祭」において、



玄界灘を渡り市杵島姫神(辺津宮)のもとへお迎えした田心姫神(沖津宮)、湍津姫神(中津宮)の御神霊は、秋季大祭最終日の高宮祭で還御いただく。この高宮齋場は、辺津宮裏の宗像山中腹に鎮座される、我が国でも数少ない露天祭祀を現在でも執り行っている古代齋場で、宗像大神降臨の地と伝わる処である。また、この神事を「みあれ祭」と称するのは、「神の御生れ」即ち宗像大神の御神威の生まれ変わり、一層の発揚を祈求することによる。

表千家奉仕 献茶祭齋行

十月十七日、伊勢の神宮では天照大神に初穂を捧げる皇祖奉斎の祭り「神嘗祭」が厳かに斎行される。この慶日に合わせ当大社では表千家（不審庵）家元直々の奉仕による献茶祭が執り行われている。

この献茶祭は、昭和三十七年当時の宗像大社復興期成会々々長出光佐三氏の御尽力により実現、第十三代表千家々元即中斎千宗左宗匠が初めて奉仕されて以来、毎年出光家の奉納



により行われ、今回で四十一回目を迎える秋季恒例の祭典となっている。祭典当日は、穏やかな秋澄みの天候に恵まれ、早朝より県内はもとより山口・九州各県の同門会員をはじめ茶道に勤しむ人々が参集、神苑は和服姿の女性達で華やかな雰囲気になりました。

定刻十一時一鼓を合図に奉仕神職、第十四代表千家々元而妙斎千宗左宗匠以下介添の家元関係者、出光興産

株式会社名誉会長出光昭介氏、同門会関係者は袂舎にて修祓を受け本殿へ参進、所定の座に着座し祭典開始。

斎主が祝詞を奏上、続いて献茶の儀が執り行われた。千宗左宗匠は拝殿に設けられた風炉前に端座し、切柄杓の手許、袱紗さばきも鮮やかな「動と静」とが見事に調和した、淀みない清らかな御点前が披露された。

宗匠の御点前を拝観しようと拝殿周辺に詰め掛けた拝観者は、その一挙



敬虔な祈りを捧げる出光昭介名誉会長

手一投足を見逃すまいと、真剣な眼差しで宗匠の作法を見詰め、左右に設置された大型テレビのモニターに見入り、辺りは咳き一つない張り詰めた静寂に包まれた。

やがて金の碗に濃茶、銀の碗に薄茶の二服が点てられ、雅楽の調べが流れる中神職の手により御神前に奉獻された。

献茶の儀に続き、斎主、家元、出光昭介名誉会長、同門会代表者が各々玉串拝礼を行い、一時間余に及ぶ本年の献茶祭も厳肅裡に滞りなく終了した。

祭典後、参列者は儀式殿に設けられた「出光副席」、斎館に設けられた「同門会副席」へ参席、茶席に揚げられた掛軸・茶道具の逸品を鑑賞しながら、お茶を戴き「侘・寂」の境地に浸り、至福の一刻を楽しんだ。今年の献茶祭は日曜日ということもあり、例年にも増して参列者多く、各副席は夕刻まで列を成した。

茶道とは

元来、お茶の文化は中国から伝えられたものだが、我が国ではお茶をただ単に飲んだり、喫したりするにとどまらず、人の心・精神の向上をはかるもの、すなわち茶の湯の道「茶道」として確立された。

室町期、村田珠光じゅうこうにより茶道は産声を上げ、竹野紹鷗しゅうおうを経て千利休に到る。利休は禅の精神を取り入れ、簡素・和敬静寂を本体とする侘茶を広め大成する。その後、利休の子孫が表千家、裏千家、武者小路千家の三家に分かれて今に伝わり、お茶は「人の心を映し出す美德」「美意識」「審美眼」「人との交流と心の触れ合い」「交際における主・客の思いやりと感謝の気持ち」等々その様な和の心を「茶の心」として大切に育んで来た日本固有の文化遺産となっている。

尚、「献茶」とは神仏にお茶を捧げる行為を指し、風習の中



に「家の神棚」「祖霊舎」「仏壇」等に、毎朝一番茶を差し上げるお茶も同様であるが、茶の道に携わる人の間では点前をして威儀を正し神社・仏閣に献上する儀式のことを言う。ちなみに「献茶」は御神前の場合で、御仏前では「供茶」と呼ぶ。



第六回 宗像おどってん祭



開催された。

当日は県内を中心に、遠くは長崎県佐世保市、山口県下関市などから全三十チームが集まり、まず当大社御神苑で神職から一組「お祓い」を受けた後、奉納踊りを行った。その後、順次宗像市の赤間宿場町跡の三会場に繰り出した。

午後二時までは各チーム当大社に戻り、特設ステージが設けられた第一駐車場で「ファイナルバトル」

九月二十三日、今年で六回目を迎える「宗像おどってん祭」が、午後から強い雨足となる悪天候の中にもかかわらず行われ、神郡宗像は熱気に包まれた。

当大社を会場としては、昨年神郡宗像の総氏神「宗像大社」に是非奉納すべきである、また参加者らの広い会場で思いつき踊りたいなどの要望から始まった。昨年は関係者参加者らに深い感銘と充実感を得て行えたことから、本年も是非昨年同様行いたいとの、切なる希望により

飛ばす勢いであった。
表彰式後は、参加者同士、来年の再開を誓い合い当大社を後にした。各賞受賞者は次の通り。

感動大賞

長州青組 (山口市) ※二年連続

準感動大賞

させば飛躍年隊二〇〇四 (佐世保市)

おどってん大賞

サンフレッシュダンス (宗像市)

宗像大社賞

太宰府まほろば衆月梅 (太宰府市)

宗像観光協会会長賞

ストレイキャッツ (佐賀市)

玄海ホテル旅館組合組合長賞

雅楽艶 (下関市)



真言宗僧侶

弘法大師入唐二二〇〇年を記念し 拜殿で読経



また、同師は帰国後都に上るまで空白の一年があるが、その際に、中世の神仏習合時には当大社の神宮寺であり、現在も宗像三神の本地仏を本尊とする真言宗御室派別格本山「鎮国寺」を開創された。当日午前九時には、同会の僧侶・檀家らが九州各地から続々と参集。同三〇分、齋館より当大社神職を先頭に、昇殿する僧侶、弘法大師の木造を捧持した僧侶が参進した。

正式参拝後、僧侶らが一斉に読経。檀家らも加わり、周囲は平素とは違った荘厳な雰囲気にも包まれた。その後、一行は大法要会場である鎮国寺へと、当大社を後にした。

九州にある真言宗の寺院八十八ヶ所で構成される「九州八十八ヶ所霊場会」が開創二十周年を迎え、また今年には弘法大師入唐二二〇〇年という節目の年を迎えたことから、同師縁の当大社・鎮国寺で法要を行おうと計画がもたれ、十月五日同会の僧侶・檀家約五〇〇人が来社し、世界平和を祈って般若心経を読経した。



同師は唐に渡る際に、航海の安全を祈って当大社に参拝、帰国後、もすぐに御礼参拝をしたと伝えられている。

決断力

その時昭和の経営者達は

瀧口凡夫

出光興産株式会社

出光佐三

店主

その17

新しい世紀と出光①

紺碧の海に白い航跡残し

佐三は一九八一年(昭和五十六年)三月七日、東京都目黒区青葉台の自宅で波瀾に満ちた生涯を閉じた。満九十五年七カ月におよぶ人生であった。

翌日の新聞は各紙とも、一面に本記社会面や経済面に評伝、関連記事を載せた。「民族路線、気骨の経営者」「家族主義、民族石油資本育てる」「民族石油育ての親」など、一般の経済人の死亡記事とはひと味もふた味も違う扱いであった。筆者も当時、論説委員長として勤務していた新聞に「ひと筋の道を歩き通す」と題した評伝を書いた。二十五歳のとき創業して以来七十年間、荒波にもまれながらも航海を続けた船が、紺碧の海に白い航跡を残して突然消えた…。そんな気持ちでペンを走らせたことを覚えている。

東京・芝の増上寺で行われた葬儀、告別式には、一万人を超す人びとが焼香した。いまは父母と同じ、福岡県宗像市赤間の出光家の墓所に眠っている。



佐三は一代で出光興産を築くとともに、明治、大正、昭和、を通じ、わが国の石油産業の発展に一生を捧げた。

佐三が人生を終わってから十日余りあとの十九日、パリのプチ・パレ美術館で「永遠なる日本の美術展」が始まった。

展示は出光美術館所蔵の宗達、光琳の屏風、歌麿の美人画、雪舟の山水画

それに仙厓の書画、古唐津の焼き物など、国宝級の逸品を含めて百七十四点、出光の企画にパリ市とプチ・パレ美術館が協力して実現した。

当時の新聞報道によると、会場には初日から連日千人近くが入り、盛況だ

った。人々は「心が洗われるようだ」「美しい日本文化の深さを知った」などと語った。

また、ル・モンド紙は「屏風の世界の影に」と題する長文の記事を載せ、この美術展がアンドレ・マルローと佐三との「幸運な出会いの成果」だと紹介した。

アンドレ・マルローはフランスを代表する作家、文化人である。政界にもかわり、ド・ゴール大統領のころ、文化相などを務めた。親日家としても知られ、七四年の四度目の来日るとき、とくに希望して出光美術館で三時間ほど佐三と会った。

このときの対談記録が残っているが、佐三が行った多くの対談の中で、これほど気の合った進行はめずらしい。日本と皇室、武士道、神風特攻隊、共産主義とデモクラシーなど、ふたりは長年の心の友のように語り合った。

この中から、ふたりの共通語として

「永遠の日本」が生まれ、七八年十一月に東京の出光美術館で「アンドレ・マルローと永遠の日本展」が開催となり、八一年三月の「永遠なる日本の美術展」と続いた。東京、パリでの開催はふたりの暗黙の約束だった。

日本の文化を世界に紹介することは、戦後まもなくからの佐三の念願だった。五六年には、米国オーランド市で開かれた日本文化祭に初めて仙厓の書画を出展、その後も欧州各国での巡回展などに努めている。

プチ・パレ美術館での「永遠なる日本の美術展」は、日本の伝統文化の流れを示すため、想を新たに試みであり、九八年(平成十年)には出光昭介会長(出光美術館長)によって、ロンドンの大英博物館で同じ館蔵品による「琳派展」が開かれている。

九〇年、昭和天皇の御製集「おほうなはら」が刊行された。その中の昭和五十年代の章に、八一年(昭和五十六年)にお詠みになった歌があった。

出光佐三逝く 三月七日

国のため

ひとよつらぬき

尽くしたる

きみまた去りぬ

さびしと思ふ

佐三は泉下で、この歌をどう受けとめているであろうか。

5대양 6대주를 누비며 175개국에 수출하는 대한민국!

남북교류가 실현되면 품질 좋은 한국제품들이 여러분들을 찾아갈 것 입니다.



韓国から北朝鮮へのメッセージ

十一月号が発行される頃には国民文化祭がはじまっている。文化の国体といったら分かりやすい。第十九回が本県、次の二〇回は福井県、二一回が山口県とつづく。一年前から準備にとりかかっていたが、月日のたつのは早いもので、とうとうはじまった。

古賀市が「風と潮のローマンス」をテーマに漂着物を取りあげた。三〇日にビーチコーミング(海岸の漂着物採集)から、古賀市中央公民館で十一月六日の、海は広いな大きなで

(続) 浜の寄物

188
いしただし

海に因む歌と踊りを、七日に谷



川健一氏の講演「黒潮に寄り来るもの」と三人の講師による漂着ビン、二〇〇〇年前のヤシ簞、てつほうについて語ってもらう。宗像市は一〇月三十一日にユリックスでshall weダンス、十三〜十四日の子供演劇祭、十四日は、全国大道芸まつりである。大島村は十一月三日に大島小学校多目的ホールで「神郡宗像を探る」として、菅田正昭氏の記念講演、つづいて宗像大社高向正秀権宮司と菅田正昭氏との討論会となっている。福岡町は「ふくま演芸まつり」で十三日〜十四日にわたって福岡町公民館で、落語で笑って奇術でびっくり。津屋崎町は十一月一日〜三日までカメリアホールで「伝統文化とロマンの祭典」が行われて十二日からは日本海ガメ学会が行われる。来年は福岡と津屋崎、宗像市と大島が合併するので、最後の大事業となる。さて古賀の漂着物展示で、新潟県の陶山修氏から出品してもらったものに、二六年間漂流していた瓶がある。

アメリカのロスアンゼルスからメキシコのアカプルコに向かう客船からシャンペン瓶に入れられていたメッセージで、他に絵ハガキ、一九六九年一月七日付の船内新聞が入っていた。当時ベトナム戦争中で、記事にも戦争のことが報道されている。カルフォルニア寒流から北赤道海流にのり、更に黒潮から対馬海流に流れて、新潟県四浦巻町四ツ郷屋浜に漂着したもので、投瓶から二六年どこをどうさ迷っていたのか、ただただ驚くばかりである。

もう一つは、韓国が北朝鮮にむけて流していた海漂器(海から容器にメッセージを入れて流すもので、かつて台湾が中国大陸にむけて行っていた)。十五センチ前後の発泡スチロールの容器に缶詰一個と宣伝ビラが三枚入れられている。ビラの表にはタンカーに満載されたコンテナの写真「五太陽、六大州をめぐり、一七五ヶ国に輸出する大韓民国、赤の文字で南北交流が実現すれば、品質の良い韓国製品が皆さんのところにとどくでしょう」とある。裏は「世界第十二位経済大国に成長した大韓民国(電子、自動車、造船)の生産中の写真が紹介されている。他にカセットテープが入ったものもある。一見の価値ある展示。

秋の交通安全キャンペーン



察署中垣交通課長が挨拶、今回の重点項目に「高齢者の交通事故を防止しよう」、「シートベルトとチャイルドシートの着用を徹底しよう」、「交差点の事故を防止しよう」の三点をあげ、ドライバーに訴えることを申し合わせた。

今年も秋の交通安全県民運動(九月二十一〜三十日)で、当地宗像でも九月二十五日午後三時より、宗像市三郎丸で街頭キャンペーンを行った。

当日は爽やかな秋晴れの天候に恵まれ、当大社からは神職・巫女が出向。宗像警察署、宗像交通安全協会や、市・郡内諸関係団体の皆様と一緒に約四十人が参加した。このキャンペーンが少しでも交通事故の防止・解消に役立つことを切に願う。

第五一九回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日メ切

池田 森 龍子
台風引き裂かれたる枝先に収穫前の栗の実重し

光岡 佐藤 純一
向日葵は錦をまとう鯉に似る陽のひかりあび日輪を追う

浮羽 向 則正
結句は平凡だが、向日葵の美しさを鯉のようだとした表現はお手柄

鐘崎 安永 久子
高山の旧き市街に鉄線のあざやかな花家こと並ぶ

田熊 有田 ゆり子
足場かけ女庭師は手際よし取線香腰に吊して

王丸 小方 玲子
古いからこそ愛着があるのだ。板を打ち付け台風から守る作者の姿が見える

曲 天野 玲子
旧盆の霊送りであろう。美しいうろこ雲はまた祖先の霊でもある

電車待つ間をいせいに学生らケイタイ電話取り出している

田野 森 甲子
ケイタイは学生達の必需品である。何を話しているのか知らないが

福間 池浦 千鶴子
収穫前の稲穂を擬人化して台風の被害を案じている作者

逆上がり出来ぬ児らしも三人の賑やかな声知まで届く

逆上りの練習に励む児らに作者は昔の己を重ねているのかも知れない



日の里 石松 弘次
難聴と学無き身にも鷹揚に君は畑打つ八十五歳

津屋崎 佐々木 和彦
水草の覆ふ池へと流れ込む水の音する葛葉がくれに

田野 森 つるの
山の辺の風景だろう。一服の清涼感のある歌

八幡 伊豆 統一郎
八十七の吾が目標と言ふ弟妹勇気づけられ歌詠みゆかむ

飾られし月見団子の表には兎の耳目描かれてあり

日の里 大和 美由紀
もてなす側の心意気が感じられる月見団子である。こころ行く月見であつたらう。羨しい気がする

朝野 藤井 浩子
台風に薙ぎ倒されしひまわりをえんやえんやと起して回る

船酔ひに苦しめられし隠岐ここに樹令二千年の杉を見上げる

大井 木原 房子
日本歴史上かかすことのない島隠岐の樹令二千年の杉を見上げた作者の胸中に往来したものはなんであつたらうか

暇をかけた夫の播きゆく大根種蟻の寄り来て引づりてをり

福間 香月 照子
四、五句には作者の優しい目差しがこもっていて、なかなかいい

うすべにのふような花に降る雨は夏の疲れをいやしてくれる

大島 杉田 禮子
暑かった今年の夏もやつと終わった安堵感がある一首

朝まだき島に渡船運航の知らせがひびく台風去りたり

選者詠
スカート風をめぐられ曝したる太腿白し太腿菩薩

心痛死過勞死するなく辿りつきし八十歳なり大切にせむ



宗像大社歌会 俳句作品集(四九四)

光岡 井上 嘉治
陽炎に数台の貨車燃えること

光岡 白土 凌一
虫の音に心もはずむ吾身かな

日の里 花田 いつ枝
行台ひの空や宮居の松手入れ

東郷 宗風社俳句会
秋深み潮路遙かに燕翔つ

吉田 湧泉
浜の砂白く乾きて夏果てる

三浦美千代
月囁しあかず眺めて静かな夜

田中 雨葉
雨に影杭と蜻蛉町遠し

木原 房子
善なくある倅せや秋意満つ

編集後記

社報「宗像」が一新され、やつと、もう一年が経ちました。真っ白からの制作のため、やりたいようにやれる半面、仕上がらない。校了しない焦りを何度も経験しました。一年経てば前例を参考に、レイアウトもスピーディになって、さらに紙面の充実に力を注ぐことが出来ると考えています▼編集社「ジーエータップ」の担当者とも段々息が合ってきているのを最近感じます。編集者とデザイナーと二名おりまして、二人とも二十代前半の女性です。小生も一応まだ二十代ですので、若いパワーでしばらく発行して参ります▼今後共御愛読いただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。(M.O.)

宗像大社社務所 発行所

〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311(代)
発行人 伊藤佳和
編集人 大塚宗延
制作 ジーエータップ
印刷 セネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円